

# 「木の香の家」の「家づくり」

## 高断熱住宅との出会い

私が、はじめて家づくりに携わったのは、この東北には「高断熱高気密住宅」という言葉すら広まっていない時期でした。しかし、私の初めての現場は、土台に栗、柱には樹齢百年の杉、屋根は瓦一文字葺という純和風で、しかも在来軸組み工法でありながら高断熱高気密という住宅でした。設計事務所さんの「これからの時代の住宅」・・・の言葉に、木造すら初めての私が、不安というよりも、「これを覚えてやる」という期待感でその現場に集中したことを記憶しています。その工事が、設計事務所さんや大工さん、そして、私も含めて四苦八苦したことも・・・。

「和風住宅は寒い」

この固定観念を払拭するには、それからそんなに時間を必要としませんでした。出来上がったその純和風住宅の快適性は、お施主さんはもちろん、工事に携わった私たちも驚き、そして強い自信を持つには十分なものでした。そして、今、考えて驚かされるのが、その時、既に防腐木材、防蟻薬剤、内部の塗料などへの注意が、その家づくりに施されていた事です。「高断熱高気密」の言葉すら、よく知られていない時に。

## 私たちの家づくりに断熱性能を求める理由

時も流れて現在では、多くの工務店さんも勉強し、大手ハウスメーカーさんまで「高断熱高気密」を叫ぶようになりました。多くの方が、快適で長寿命の住宅に暮らせるようになってきた事は、非常に喜ばしいと思います。しかしその一方、中途半端な知識で家づくりをし、問題になっている事も出てきているようです。ホルマリン問題、過換気による室内乾燥問題、反対に換気をしなかったり、間違った気密工事による結露問題、などです。これらの問題が、「高断熱高気密住宅」=「アレルギー住宅」というような、ねじ曲がった偏見に結びつき、評論家の方々の言葉や、新聞の活字となって踊る事もよく見られます。しかし、私は高断熱高気密住宅を良い住宅と信じてます。決して、寒い家に暮らす事が人のためとも思えません。

家の中が寒いので、コタツにじっとして、体を動かさない生活。

トイレや脱衣室でヒートショックにより倒れるお年寄り。

室内で開放型のストーブを使い、排気ガスをいっしょに吸う生活。

そして、内部結露で家の寿命を二十～二十五年とし、地球環境を壊していく家。

そのような家の方が良いとは、とても思えないのです。使う建材にさえ注意すれば、高断熱住宅は、本当に快適な暮らしになります。そのため「木の香の家」には、高断熱快適性を必然的に備えております。お客さまに、長く快適に暮らして頂きたいために。

### 真実の家づくりを目指したい その1

住宅業界には、数え切れないほど多くの工法があります。それぞれに一長一短があり、プロでもその良し悪しを把握できないのが現状だと思います。そんな業界に長く居ると、月日の経過とともに、それらの工法の問題点や、隠ぺいされる決定的ミスなども、聞こえてきます。基本的には、完璧な工法など無いと思われませんが、イメージと現実のギャップのひどい工法はいくらでもあります。

\* よくあるのが、南面の外壁で暖まった空気が、北側を温かいまま降りてきて、家中を暖かく包み込むかのような理論の工法。

自然の太陽と風で空気がひゅ～っと回って家中が温かいというエコロジカルなイメージ。この名称のイメージに、魔法のような住宅になると思われている消費者の方は多いのではないのでしょうか？プロでも未だにそう思っている人はいます。しかし、何故、温かい空気が北面の冷えきった外壁と接触しながら、その温かさを保って基礎まで降りてこれるのでしょうか？棟から基礎までは、約8m～9mの距離もあります。暖かい空気は、密度が薄くなり軽くなるため、上にあがるという常識とは矛盾する理論。最終的には、質問を受け付けられないセミナーと「ぐるぐるまわる」という「イメージ」論でしか答えていただけません。アクリル板で作った小型の家模型と、たばこの煙を使って、南面から入った煙が北面の下まで降りてくるという、演出された実験は見せられました。

この からくり は、次のように説明できます。

空気の流れる距離が、模型では実物の家とは比較にならないほど短いのに対し、「タバコの煙」という強い上昇気流と、流量が大きい気体を利用していること。

実験室内全体が温かく、煙の冷める要素が無いこと。

現実社会では、北側の壁が0 であるという仮定が、無視されています。

そのはざままで、その理論を信じて建てたお客様の悲劇は数多く報告されています。

表面結露で家の中が湿っばいとクレームを出す方もいますが、最もポピュラーで、最も手のつけられないのが、内部結露です。北側の土台まわりが内部結露で十年程度で腐っている住宅を実際見ましたし、よく報告されます。通気層内の空気が北面外壁で冷やされて土台付近で結露するので当然といえば当然の現象です。

この現状を見たとき、「イメージ」だけの工法の怖さを痛感しました。

ひも解いてみれば、こういう工法は、もともと温かい地域で考えられ、イメージだけで広まった工法です。建材メーカーが、自社製品の断熱材や独自の特殊な部材を高価に売るのが一番の目的でスタートした。目的の根本が違うような気がします。

ですから、次のような具体的な質問は、いっさい受け付けませんし、データーなど決して出してくれません。

一、冬に、南面の通気層内の空気が棟まで行くのに、何度上昇するのか？

二、頂上の暖かい空気が北側の土台にたどり着くのに何度になっているのか？

(外気温0 の日に)

よく、床下の空気の温度を測定してみせて、「ほら10度もあります」とみせられますが、通常、基礎で断熱していれば、14~15度は保ちます。10度とは、どこからか冷たい空気が大量に進入してこないと起こりえない結果と思われるます。

#### \* 名ゼリフで消費者を乗せる工法

最近、住宅メーカーの営業戦略に、名ゼリフを作って消費者の方に好印象をすり込むという手法が多くみられます。競争社会、経済社会ですから、これはあってしかるべきでしょうが、有名なものに次のようなものがあります。

「機械で換気する家なんかにすめるか！」・・・で有名になった「中断熱中気密??」という住宅で話題になった・・・たしか「こんな家に住みたい」という本だったと思います。

しかし、この住宅の実状は、普通の高断熱住宅と比べて2倍近い灯油量で家を暖めているという悲惨な結果になっているそうです。その本のイメージとは、随分違う結果ですが、建てる前のお客様は、魔法のような家になるのだらうと思われていたに違いないと思われるます。

しかし、建ててしまった後知人の家の暖房費を聞いてびっくりすることになります。「後の祭り」という言葉で片付けるには、ちょっとかわいそうな気がします。半永久的に2倍近い灯油を使い続けるわけですから、試算して合うようであれば断熱リフォームをお勧めしたいくらいです。

また、最近では、こんなセリフもあります。

「わずか0.2mm厚のシートに家の寿命を任せていいのでしょうか？」と

「ビニールハウス住宅」のセリフで有名になった外断熱の一つ

私は、基本的にグラスウールやセルローズファイバー断熱の内部結露を防ぐ工法で家づくりをしています。もちろん発泡系の断熱材をしたこともあります。

このビデオを見たとき、外断熱を棚に上げて、ビニールハウスといっている表現に疑いをもちました。

ポリシートは、湿気を通しにくい・・・という見た目のイメージを利用したのですが、発泡系断熱材もポリシートに負けず劣らず湿気を通しません。

ポリシートを柱の内面に貼れば、柱は外壁側の通気層で呼吸します。発泡系断熱材を柱の外面に貼れば、柱は内壁側で呼吸します。理屈は同じですので、ポリシート工法を「ビニールハウス」と呼べば、外断熱も、実は「ビニールハウス」ということになります。

このビデオの中で、一部正しい表現をしていると感じたのは、「結局、良い工務店さんに巡り合わないとダメです。」という部分です。その工法に所属している工務店で、バルコニー下の部屋が、夏の間だけ結露で雨漏りのようになる・・・という相談を受けたことがあります。

原因は通気層の遮断だったわけですが、結局は、よく理解している工務店かどうかです。理論を理解している工務店であれば、発泡系の断熱材でも、グラスウール断熱でも、内部結露を防いで、住宅の寿命を100年近くに出来るのです。

そういう意味で、このビデオで「グラスウール断熱の全て = 悪い」と受け取れる表現は、ナンセンスです。

展示場に行ってみれば、この工法以外は悪い住宅のように押しまくられ、普通の住宅で坪60万円というから驚きです。

それ以上の断熱性能で、私なら坪40万円前後で造っていましたから、こんな価格で消費者が買ってくれるなら、いいなあ・・・と経営者としては、うらやましく思いました。

きっと、このビデオをご覧になって、「外断熱だけが良い家だ」と思われてしまった方は通常の価格の3～5割増しで家を購入なさるのだと思います。

高い事は、決して悪いことではありません。価格は価値観ですから、その家にそれだけの価値があると感じられれば、それはそれで正しい価格なのです。ただ、消費者を脅して、安心したいなら坪40万円の仕様を、坪60万円出せ！・・・という営業手法は如何なものかと思います。

裏の裏をたどれば、一企業が、一研究者に莫大な研究費を払うとなると、消費者から必要以上の価格で買ってもらう必要が出てくるのは当然です。

この戦略は、某発泡系断熱材メーカーが、断熱材と、サッシを売るために、一研究者を利用したに過ぎないのでしょうか。

この他にも、

\* 種火だけでも、家中に火が走る現場発泡ウレタンを堂々と施工している工法

\* 「当社の住宅はあたたかい」というイメージ表現。

どこの営業マンも「寒い家」なんて言いません。

「大きな暖房機で燃料をバンバン使えば、温かくなります」...というセリフを省略してるだけです

\* 「高気密」の言葉のイメージだけを逆手にとって、窒息住宅・・・とか、ビニールハウス・・・と、消費者を脅して、悪いイメージを植え付け、隙間風住宅を売る営業戦略。

まだまだ、数え切れないほど、住宅業界には罠がいっぱいあります。

また、住宅業界の怖さは、どんなに「宣伝イメージ」と違った使いにくい住宅になっても、それが、表に出にくいことです。自分がローンを組んで建てた住宅を自分で否定したくないという思いや、営業トークとの大きなギャップに気づいても、10年も住んでいると、昔の話とってしまうこともあります。また、車のように数年単位で買い替えることができませんので、それら工法の社会的評価が世の中に出ないという理由もあるのでしょうか。

しかし、この性質を利用したのが住宅業界の姿でありますし、現実としては、運の良い方だけが、本当に納得のいく家に住めるのであらうと感じております。

真実の家づくりを目指したい その2

「木の香の家」の家づくりには、そんな中でも、真に良いと思われる工法で取り組んでおります。

たまたま運が良かったのですが、最初に納得でき、取り組んできた工法が、結果的には一番良い家づくりだと感じております。それは、新木造技術研究協議会という NPO 法人で研究している「新在来木造構法」という工法です。

この工法は、莫大な宣伝広告費をかけておりませんので、耳になじみのない方も多いと思います。が、北海道、北東北、新潟、北関東を中心に、その建築実績は、他のフランチャイズ系の工法にひけをとりません。また、住宅金融公庫の省エネルギー仕様書の根本になっているのが、実は「新在来木造構法」であります。最近では、この工法に限らず、外断熱の場合の注意点や良い点、もっと断熱を強化して、ランニングコストをどうやって抑えるか・・・など、いろいろな工法を広く指導しております。

不思議と、先述したポリシート工法を根拠なく否定している某外断熱フランチャイズに加盟している工務店さんも数多く参加しております。多分、いろいろ見聞きして、オーバートークをしない新住協の研究や測定データーなどが、良いと判断した為なのでしょう。

何を根拠に「良い」と考えているか？

それは、小手先の「イメージ」ではなく、物理的なデーターで検証する点です。技術というのは、完璧は無いと思います。そういう意味で、技術は進歩していかなければなりません。

この協会では、現時点できる最高の技術を会員に技術情報として提供する一方、常に、そのデーターを収集して分析しております。

そして、改善点なども隠すことなく公開し、少しずつではありますが、着実に進化しております。他の工法の技術でも、理論的に良い点は良いと認め、意固地になることなくそれを取り入れます。

根本の目標は、「技術どうしの泥試合・・・ではなく、  
ユーザーが本当にいい家に住めること」ですから

具体的にどんな住まいになるかといいますと、「性能面」では次のような事があります。

外気温がマイナス5 程度でも、10帖用の暖房器具1台で40帖～50帖の部屋を、

20 に保てる性能があります。

最近では、家のどこの部分をどうすれば、暖房燃費や CO2 発生量を抑えられるかという計算が出来るシュミレーションソフト (Q-PEX) を開発して、私たちの家づくりに非常に役立つ情報を提供しております。

通常であれば数万～数十万円するソフトですが、なんと数千円で購入できますので、一般の方も、このソフトを使ってみることをお勧めいたします (^ ^)

通風と遮熱の工夫をプランに取り入れますと、夏にエアコンを使わなくても過ごせるようになります。

住宅の寿命は、約100年となります。これは、内部結露を防ぐシートの寿命が紫外線照射の実験で80年程度という根拠から算出されています。

### 楽しく家づくりをしたい

このように、いろんな工法をあげて、その技術を細かく話していくと、家づくりが面倒臭くなってきます。  
困ったものです。

また、私が、「住宅工法のおタク」ではないか・・・と錯覚してしまいます。  
困ったものです。

いろいろと理屈を並べましたが、結局は、断熱材を厚くして、内部結露を防げば、大まかな部分では、快適になります。

大事なのは、施工者が

断熱材が効くような理屈を知っていること

内部結露を起こさない理屈を知っていること 　　　　　　です。

皆さんが、家づくりに失敗しないためには、

自分の予算で建っている実際の住宅を見せてもらうこと。

そして、後日、その家に行って、営業マンのいないところで、ユーザーに本音を聞い

てみること。

宣伝から自分が描いた、魔法の家と現実のギャップを知ること。

「工法の泥試合や脅迫」は卒業して、本当に家づくりの楽しい部分に時間を割いた方が幸せです。

家族の笑顔が浮かびそうな間取り・空間構成。おしゃれな・それとも重厚な外観イメージ。

長い間生活する内観イメージ。

使いやすいキッチンまわり。

などなど、一般の方が家づくりで楽しいと感じるのは、こういう部分ではないでしょうか？

### 「木の香の家」の内部空間に対する考え方

構造や性能が確保されれば、家づくりは、味つけという作業に入ってきます。(内外装のコーディネートです。)

【木の香の家】では、お客様に、なるべく、天然木や、自然系の素材をお勧めしております。

以前から、天然の木を表した住まいを何度も見る機会があり、やはり天然木が創り出す住空間の豊かさと、時間とともに飴色に焼けていく味わいには、ひかれるものがありました。天然木の住宅が、なぜ、少なくなってしまったのでしょうか。

それは、天然木が、やせたり、反ったりするためです。現在は、天然木でも乾燥材を使っていますので、昔ほどやせたり反ったりしませんが、それでも、完全に防げません。

量産住宅をめざす大手ハウスメーカーさんにとって、木がやせたり反ったりすることは、大きな問題なのです。年間何千棟というお客様から、「反った、やせた」と言われたら、その対応に会社がパンクするといった、企業論理が働くのは当然です。そのため、営業マンが天然木を繰り返して、否定し続けざるをえませんでした。

天然木をふんだんに使う「木の香の家」でも、1枚1枚の天然板の性格が違いますので、

やはり、痩せや反りは完全には除けません。

しかし、それが、構造強度に影響することは、全くと言っていいほどないのです。

ですから「木の香の家」に住まわれるお客様に限らず自然の木を使われる皆様には、多少ですが、大量生産の家づくりとは違う考え方をもっていただく必要がございます。

子供の頃、私の家は、昔からあったカヤ葺き屋根で、柱、梁の見える家屋で過ごしていました。

その頃、雨戸の板が、長年の日射で洗濯板のように、ざらざらになっていたのを見て面白いなぁと感じたことを記憶しています。

夏になると、カヤ葺き屋根の家屋が、何故か涼しくて、よく天井を見上げながら、ぼーっと昼寝をしていた記憶があります。

また、いろんな木の節や、木目を見て、じっと何かを考えていた自分がいたことも記憶しています。

子供は、あるとき、あるきっかけで、何かに自然の法則を見つけだそうと、観察力や感性を磨いていくもののような気がします。

自然の木がそうさせたくれたのかどうかは断言できません。しかし、そういう効果が少しはあるような気がしますし、ことうう自然の木の中で育つお子さんは、感情や感性が豊かになるような気もします。

## 最後に

私たちには、芸能人による大々的な宣伝広告力はありません。

しかし、技術的な裏づけは、日本最高レベルのものをもっております。私たちが、努力してもかなわないとしたら、「ブランド名」だけだと思います。

ブランド名を買いたいと思われるお客様には、当社はお役に立てないかもしれませんが、ブランド名にお金を払わず、内容にこだわるお客様には、うってつけの会社と自負しております・・・。

そして・・・

私たちは、良い家を建てる時の一番のポイントは、お客さまと造り手側が対等の立場で、考えていく事だと思っております。

特に、造り手側が「造ってやるんだからこっちが偉い」という姿勢で家づくりを進めると、その工務店の技術力が有る無しにかかわらず、総じて良い家はできません。お客さまと造り手が、同じ目線の高さで家づくりに取り組む姿勢が必要なのです。

いっしょに2人3脚で悩み、創造していく結果、本当に良い住まいが出来るのだと、私たちは、信じております。

木の香の家 木精空間 代表 白鳥顕志